

# 門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

## 第4回 恤兵品のバット — 野球部復活その1 —

昭和21(1946)年8月、成田中学校は戦後初の第28回全国中等学校優勝野球大会に出場した。現在の全国高校学校野球選手権大会である。野球部復活わずか1年の快挙であった。そして3年連続出場することになる。昭和19(1944)年4月、旧制成田中学校に入学した生徒たちを待っていたのは、勤労働員で航空機用ガソリンのドラム缶を隠すための穴掘りや松の根を掘って松根油を取る仕事であった。軍事一色の時代で、中学校には佐倉の連隊から配属将校が来て、生徒は厳しい軍事教練を受けさせられた。もちろん野球部は活動停止。空襲警報が発令されると消防団員が回って歩き、市民は、電気を消して空襲に恐れおののく戦時下を過ごした。

それが一転。戦争が終わってみると、世の中は天と地の変わりようであった。成田中学校では配属将校は消えて軍事教練はなくなる。占領がどういうものかも分からず、とにかく不安な時期の9月、成田中学校で野球部募集のポスターが出た。石原利男さん(土屋、昭和7年生まれ)は「募集は誰がやったか分からない。好きな奴がやったのではないかな」と発起人は謎だと語る。2年生の石原さんたちが野球を始めたとき、成田中学校5年生が野球部を経験しただけで、4年生以下は野球をやる機会がまったくなかったのである。

石原利男さんは「戦争から帰ってきた者もいたし、チンピラみたいに、ギターを弾いたり、たばこを吸ったり、どちらかといえば近所迷惑な連中だね。そういう連中がみんな野球をやるようになったんだ。彼らは私たちよりもちょっと上で、遊んでいる連中だったね。今で言えば浪人かな。上の学校に行けない子、行かない子、勉強嫌いな子、かな。でもお金はそこそこある子」と評される若者たちが野球に飛び付いたと語る。石原利男さんの同級生の小野寺賢蔵さん(福岡県在住、昭和6年生ま



昭和22(1947)年の第29回全国中等学校優勝野球大会で準決勝(对小倉中)戦を前にした成田中ナイン(石原利男さん提供)

れ)も「同好会のような感じで、授業が終わると、私よりもちょっと上の先輩が中心になって、何となく集まって野球の練習をしていましたね。戦前に活躍した岩瀬さんや川口さんが復員して、毎日グラウンドにやって来て一緒に練習をしてくれました」と話してくれた。

しかし、野球を始めるには道具を用意しなければならない。戦争に負けて、とにかく物資が不足。戦地から帰った兵隊たちが恤兵品を持ち帰っていた。慰問品のことを当時は恤兵品と言っていた。現在では耳慣れない言葉であるが、江戸時代には災害や飢饉で飢えるようなことがあると、領主から「救恤米」というのが出た。その「きゅうじつ」の「恤」である。

陸軍は、兵士の娯楽を目的に野球道具を恤兵品として戦地に送っていたのである。しかも国内では野球は禁止されていたが、戦地ではむしろ殺伐とした空気を慰める娯楽の一種として奨励されていたという。この恤兵品が闇市で売られていたのである。バットは東京の大道でも売っていたし銀座には露天が出ていたという。野球をやるという仲間が、お金を出し合って買い出しに出かけた。

戦地で使用されていた木製バットには「救恤品」と焼き印が押されていた。みんなで道具を持ち寄って野球を始めることになった。石原さんのグラブは、球が当たるところに皮を貼ったズック製の粗末なものであった。グラブのことを私たちに説明してくれた石原さんは「進駐車の横流しは、なめし皮で、皮の匂いがぶんぶんしてよかったなあ」と戦後の青年時代を懐かしんでいた。

(板橋春夫)

## 編集後記

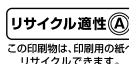
成宗電車が北の大地で今も、人々を選び続けています。この車両は大正7(1918)年に函館市へ移り、昭和11(1936)年まで市電の客車として運行された後、除雪車に改造され翌年から冬季の除雪作業に活躍したものの。平成4(1992)年に函館市制70周年記念事業の一つとして、製造当初の図面を基に当時の姿に復元されました。翌年から「箱館ハイカラ號」の愛称で函館の街を走り、再び地元の人々や観光客の足として活躍しています。

平成26年11月15日号/月2回 1日・15日発行/編集発行:成田市役所企画政策部広報課 〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地 電話0476-22-1111(大代表)

平成26年11月15日号 No.1279

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。